# 地震動の減衰補正に関する研究 その1 既存の低減式と地震動の実測値との比較 Study on attenuation correction of ground motion

Part 1. Comparison of existing attenuation correction formula with actual value of the ground motion

○周翔宇<sup>2</sup> 西村漢<sup>3</sup> 張芸<sup>4</sup> 古橋剛<sup>1</sup> \*Xiangyu Zhou<sup>2</sup> Kan Nishimura<sup>3</sup> Yi Zhang<sup>4</sup> Takeshi Furuhashi<sup>1</sup>

The evaluation of earthquake resistant performance by limit sthength calculation method is the method with predict response at earthquake by acceleration response spectrum, about creating restoring force characteristics of each floor, and change the building to single particle system which have equivalent natural period and characteristic of attenuation.

# <u>1. はじめに</u>

限界耐力計算による耐震性能評価法は,建築各階の 復元力特性を作成し,建物を等価な固有周期,減衰特 性を持つ一質点系に置き換えた上で,加速度応答スペ クトルを用いて地震時の応答値を予測する手法であ る.令第82条の5第五号八に規定する振動の減衰に よる加速度の低減率Fhは,式(1)によって計算するも のとする.ただし,建築物の地震応答に対する部材又 は建築物の減衰性の影響を考慮した計算手法によっ て算出できる場合においては,当該計算によることが できる.尚,Fhは減衰定数(以下 h で示す)h=0.05 で Fh=1となる様にしている.

$$Fh = \frac{1.5}{1+10h}$$
(1)

しかし、下記の提案式から、実際の地震動の低減具 合と告示式の低減補正値が一致していない.そこで本 報は実際の地震動のデータを用いて告示式や提案式 と比較して新たな式を提案することを目的とする.

## 2. 研究方法

はじめに述べた提案式は下記に示す. 長岡修・五十田博の提案式

$$Fh = \sqrt{\frac{(1+25h_0)}{1+25h_{eq}}}$$
(2)

久保哲夫式の提案式

$$Fh = \frac{2.25}{1.75 + 10h} \tag{3}$$

アメリカの ATC-3(自然災害と地盤工学)

$$Fh = \left(\frac{0.05}{h}\right)^{0.4} \tag{4}$$

いずれの式も h=0.05 で Fh = 1となる様にしていて, 計算上, hを増やすと応答加速度倍率は1/Fh分小さ くなることになる.続いて,実測値との比較に関して 説明する. h=5%の場合の応答加速度・応答変位を1 とする1%,3%,5%,8%,10%,15%,20%での各地 点の応答値の平均を掴む. 地震動は内陸型と海溝型に 分類し,一つの地震動データに30 地点の観測点のデ ータを示す. 周期間隔は等差とする.

まず,各地震動の周期において0.01~5.0sと5.0~10s でそれぞれ100点の応答倍率を平均し,周期ごとの傾 向を掴む.続いて加速度と変位との傾向の違いを掴む. 周期は0.01~5.0sとする.最後に各地震動の30地点の 震央距離と加速度,変位との関係を掴む.周期は0.01 ~5.0sとする.

# <u>3. 結果</u>

図1,2から0.01~5sは15%以降各提案式よりも大き くなって5~10sの間は5sまで以上に高減率の応答が 大きくなっている.図3.4は観測点のばらつき10sで 大きくなるものの,全体では違いが見られない.図 5,6では内陸型に比べ低減衰での応答がやや小さいも のの,周期の違いが大きくみられる.図7,8は内陸型 の傾向に似ている.図9,10は15%の高減衰で加速度は どの提案式より大きいが,変位の方は提案式に対して それなりに収まっている.図11,12は内陸型の傾向に 似ている.図13,14は加速度においては震央距離に対 して1%,15%,20%ではそれなりに連動している. 図15,16は図13,14に比べ加速度応答倍率と震央距離 との連動は弱い.

## 4. まとめ

本報では各地震が内陸型と海溝型に分類し周期 0. 01~5.0s と 5.0~10s と比較し,加速度は後者では高減衰 で大きくなる傾向がある.一方の変位は周期ごとの違 いはあまり見られない.

その結果,告示式と既存の提案式に対する実測値は 加速度においては減衰が15%辺りからどの式よりも 大きくなっていることが分かった.その2では本報の 結論を基に各応答の低減式を提案する.

#### 【参考文献】

日本建築学会:「地震荷重 - その現状と将来の展望」,1987年1月

2) 日本地震工学会論文集 2013

3) 平 12 建告第 1457 号第 9 平成 19 年改正

4) 伝統構法を生かす木造耐震設計マニュアル―限界 耐力計算による耐震設計・耐震補強設計法 学芸出版 社, 2004.3

1.日大理工・教員・建築 2.日大理工・学部・建築 3.日大理工・院(前)・建築 4.元日大理工・学部・建築

平均



0.15



滅喪定朝

0.05

Figure.2 Reply acceleration magnification cencerning each h with 5.0~10s

減衰定数

0.15

0.15

Figure.4 Reply acceleration magnification

cencerning each h with  $5.0 \sim 10s$ 

0.2

0.05



0.2



Figure.3 Reply acceleration magnification cencerning each h with  $0.01 \sim 5.0 s$ 



cencerning each h with  $0.01 \sim 5.0$ s



## Difference for each Tokachi-oki Earthquake (Trench type)

1.8

1.6



Figure.7 Reply displacement magnification Figure.8 Reply displacement magnification cencerning each h with 0.01~5.0s

0.4 0.2 0.15 減衰定素

cencerning each h with  $5.0{\sim}10s$ 



Comparison of Miyagi Nairiku Earthquake Response Acceleration and Response displacement (Inland type)



Figure.9 Reply acceleration magnification cencerning each h

Figure.10 Reply acceleration magnification cencerning each h

Comparison of Ibaraki-Ken Earthquake Response Acceleration and Response displacement (Trench type)



Figure.11 Reply acceleration magnification cencerning each h

Figure.12 Reply displacement magnification cencerning each h



0.8 11.1 . 減衰1% 減衰3% 0.4 • 減衰5% • 減衰8% 減衰10% •減衰15% 0.2 •減衰20% 220 270 70 120 170 320 20 震央距離(km) Figure.14 Reply displacement magnification



Figure.13 Reply acceleration magnification cencerning each h

Tendency according to the epicentral distance by Southeast of

cencerning each h



Kii peninsula Offshore Earthquakes (Trench type)



Figure.15 Reply acceleration magnification cencerning each h

Figure.16 Reply displacement magnification cencerning each h

5%を1とす。 9.0 5%

0.4

0.2

20